The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創造論と内在因としての実体 : ピエール・ベールのスピノザ批判
Author(s)	中野, 彰則
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2004, 38, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

創造論と内在因としての実体

――ピエール・ベールのスピノザ批判――

中野彰則

はじめに

ピエール・ベールは主著とされる『歴史批評辞典』の「スピノザ」の項目において、長大なスピノザ批判を展開する。中でも最も有名なもののひとつは、罪悪や悲惨さについて註(N)で述べられるドイツ兵とトルコ兵の比喩のくだりであろう。そこでは、スピノザ哲学においては神自身が「加害者兼被害者」になるということが強い調子で非難されている(261)。しかし項目全体の大部分を占めているのは、そのような倫理学の存在論的基礎となるであろう実体や様態の概念についての詳細な批判である。もちろんその全てを検討することはできない。そこで、本論では項目本文についての註のひとつに着目する。その註では、単一実体説とでも言うべきスピノザの哲学、そしてその批判の根拠となる被造実体の問題、さらにその被造実体の問題を軸にして議論が展開されている。それらを見ていくことで、ベールの批判がどのようなものであったのか、その一端を明らかにすることをめざしたい。

第一節　単一実体説

「スピノザの学説が全然わかっていない」という批判に反駁する註(DD)においてベールは、自分が批判しようとしたのは意味が明確でなおかつスピノザの体系の土台をなしているような定理であると述べた上で、註(P)の参照を指示する(268)。そこでは『エチカ』第一部の定理十四「神のほかにはいかなる実体も存しえずまた考えられえない」ならびに定理十五「すべて在るものは神のうちに在る、そして神なしには何物も在りえずまた考えられえない」という二つの定理が引用されている。そこからベールは、結局スピノザが説いていたこととして以下の三点にまとめる。「1、宇宙には実体がひとつしかないこと。2、その実体は神であること。3、個々のあらゆる存在、物体の延長、太陽、月、草木、獣、人間、またそれらの運動、観念、想像、欲望などは神の変様であること」(*ibid.*)。またベールはこの他にも様々な項目において言及されている古今東西の様々な教説を「神は宇宙にある唯一の実体で、他の存在はみなこの実体の変様にすぎない」というような構造に定式化し、それらを一括して「スピノザ主義」の名のもとに理解する。

それでは、ベールはそうした「スピノザ主義」、あるいは単一実体説の何を批判するのか。実体が唯一であるということの何が問題となるのか。それはどのような文脈において議論されているのだろうか。ベールの議論に従って見ていくことにしよう。例えばスピノザにおける実体の概念についてベールは、「実体」という語の意味そのものに関する見解についてはスピノザに対して異論はないとしそれを容認している。「実体」であるからには全ての原因からは独立して永遠かつ必然的に存在していなくてはならない。またそのような「実体」は神のみである。単一実体

説の批判されるべき点は、そうしたスピノザの考える実体の定義そのものにあるのではなく、むしろ「態様(modalitez)、変様(modifications)、様態(modes)」といった語の意味にある(*ibid.*)。

ベールは、それらの語を「新派の哲学者(les nouveau Philosophes)」が言っている意味にとった、と述べる(*ibid.*)。以下ではベールが念頭におく実体や様態に関する論争に沿って見ていきたい。まずは存在に関する「哲学者の定説」の簡潔なまとめに目を向けてみよう。それによれば、「存在という観念」には「それ自体によって存在する」ものとしての「実体」と「他のものの内に存在する」ものとしての「偶有性」の二つがある(*ibid.*)。ところで、「偶有性」とは「他のものの内に存在する」もので「内属基体(sujet d'inhesion)に本質的に依存するから、内属基体なしには存在しえないということを哲学者はみな認めていた」(*ibid.*)。つまり「偶有性」はそれが内属基体とする実体から切り離しては存在しえない。ところが、いわゆる「実体変化(Transsubstantiation)」論争以後には、これとは別の考え方が現れる。すなわち、実体としてのパンがキリストの肉に変化するという「実体変化」が起こっているにもかかわらず、その見かけ上のパンはそのままであるのだとすれば、実体としてのパン〔基体〕に内属していた見かけ上のパンは、その基体なくしても存在していることになり「偶有性は基体なしにも存続しうると哲学者も言わざるをえなくなった」(269)。つまり「実体とその偶有性との実在的な区別やこの二種類の存在が相互に分離できることを認め、分離できるがゆえにどちらももう一方なしに存続しうる」(*ibid.*)と考え、「偶有性」が実在的であることを認めるというのである。

しかし「基体との区別が実在的でなく基体の外には存続しえないような偶有性もある」とする哲学者もいた。「デカルト、ガッサンディ、総じてスコラ哲学を捨てたすべての哲学者は、偶有性が基体との分離後も存続しうるよう

な形で基体と分離できるのを否定し、様態と呼ぶ偶有性の本性を全ての偶有性に与え、偶有性という言葉よりもむしろ『様態』、『態様』、『変様』という言葉を使った」(*ibid.*)。例えばデカルトの『哲学原理』において述べられているように、「実体が触発され(affici)、また変化させられたというように考える場合には、われわれはそれらを『様態』と呼ぶ」[1]。そしてスピノザは、「様態」とは「実体の変状(affectio)」であるとする[2]。これらを受けてベールは、「大のデカルト派だった」スピノザは「実体の変様」をデカルトと同じ意味で使用していたに違いない、と考える。また、デカルト派はそれ以外に様態を認めず、「偶有性」とはその基体なしには存在しえないものである(*ibid.*)。すなわち「偶有性」が実在的であることは認められない。結局、様態とは実体そのものの触発ないし変状であるのに対し、偶有性とはその基体に付随するようなものとして区別される。

ベールは、実体、偶有性、様態という概念の歴史的経緯を簡単に振り返った上で、「実体変化」論争を経た「新派の哲学者」、とりわけデカルトの影響を受けていることから、スピノザが考える「実体の変様」について確認する。しかし、これだけでは問題ははっきりしない。ベールによれば、スピノザの単一実体説の問題は「実体」そのものにあるのではなく「態様、変様、様態」にある、ということであった。けれども、スピノザの「実体の変様」の語の定義において「新派の哲学者」たちのそれと同じというのでは問題の所在は明らかでない。われわれは次に、スピノザの「実体の変様」についての具体的な議論を見なければならない。

第二節　被造実体と神の不変性

デカルトやその他の哲学者たちの「実体の変様」という語の意味を受け継いでいるにもかかわらず、スピノザの

「実体の変様」の理解には問題があるとされている。それはなぜか。例えばベールは次のように述べている。

「もしスピノザが物質または延長や人間の魂についてデカルト氏と同じ観念を持ちながら、しかも、実体とはいかなる原因にも依存しない存在だと考えたがゆえに、延長にもわれわれの魂にも実体という資格を与えたがらなかったのなら、私は自分の攻撃が見当ちがいで、スピノザに実際には持たなかった意見を帰しているのを認めよう。〔中略〕実体はあらゆる動力因からも質料因からも内属基体からもひとしく独立してそれ自体で存在するものだ、とひとたび措定したからには、物質も人間の魂も実体などとスピノザは言うはずがなかった。そして、通説どおり存在を実体と実体の変様という二種類にしか分けなかったから、物質も人間の魂も実体の変様にすぎないと言わざるをえなかった。どんな正統派の人でも、実体のそういう定義にしたがえば宇宙にはただひとつの実体しかなく、その実体は神であるのに異論はあるまい」(269、傍点引用者)。

ベールは、スピノザが物質ないし延長、あるいは魂についてデカルト同様に考えてはいるものの、単に「実体とはいかなる原因にも依存しない存在だ」という定義を厳格に適用するだけであるというならば自らが思い違いをしているかもしれない、と言う。スピノザは「いかなる原因にも依存しない存在」という実体の定義に厳格であるがゆえに神のみを唯一の実体としたにすぎず、それについてはたとえ〔カトリックの〕正統的な立場に立つ人でさえも異論をさしはさむことはできないはずである。ベール自身もこれに反対はしない。すでに見たように、彼はスピノザの「実体」という語に関しては何ら反駁しないと明言していた。問題は「延長にもわれわれの魂にも実体という資格を与えたがらなかった」「物質も人間の魂も実体の変様にすぎないと言わざるをえなかった」という記述である。

スピノザにおいては、物質や魂には実体の定義が適用できない。明らかにベールは、スピノザが物質や魂に実体の資格を与えていないこと、換言するならばいわゆる「被造実体」を認めないことを問題にしている。ベールは次のように述べる。

「すると残るは、スピノザが実体の変様を二種類に細分するかどうかしかなくなる。彼がその区分を用い、この二種類の内ひとつはデカルト派その他のキリスト教哲学者が『創造された実体』と名付けるもので、もう一種類は彼らが『偶有性』または『様態』と名付けるものだとしたならば、スピノザと彼らの間には言葉の争いしかなくなってしまい、彼の全体系を正統理論へと引き戻してスピノザ派を雲散霧消させるのは易々たることになる」(*ibid.*)。

例えば、デカルトは『哲学原理』において、存在するために他のいかなるものをも必要としない存在こそが実体であると述べる一方で、全く何も必要としない実体は神でありその他全ての実体は神の協力を必要とするという条件を付すものの、神以外の存在にもそれが実体であることを容認する。言うなれば実体の定義における適用除外を認めている。神と被造物は「一義的に(univoce)」ではないにせよともに実体なのである。[3] 一方ひとつの可能性として、その厳密さゆえ「被造実体」という概念こそ出さないが、「実体の変様」の中にスピノザは「被造実体」の存在の余地を認めているのではないかという問いに対しては、後で確認するようにスピノザは認めていないとベールは考える。もし認めるのであれば、それは単なる言い方の問題でしかない。繰り返すが、スピノザにあっては実体とは神のみに厳密に適用されるべきであって、物質や魂にはその定義は適用されずそれらは実体の変様にすぎないのであ

る。ベールの批判する単一実体説とは、こうした被造実体の存在の否定こそがその核心をなしている。

被造実体の否定はなぜ批判されるのか。まずひとつには、註(CC)において述べられているように、神の不変性に抵触するからである。そこでは「無限で必然的な実体としてのスピノザの神には絶対にいかなる変化も起こらないことに注意すれば十分だ」というスピノザ擁護の弁に対してベールが反論を加えている。すなわち、スピノザの哲学にあっては実体はそれ自体としては常にそのままであって様相のみが移ろうのだ、とすることへの反駁である。そもそもこのようなスピノザ派の反論は、すでに見たように「様態」についてではなくデカルト派が区別したような「偶有性」に当てはまる議論であろう。スピノザは「実体の変様」をデカルト同様「偶有性」ではなく「様態」の意味にとっていたのだから、それは文字通り実体そのものの変様のことである。またベールは次のように言う。自分が批判しているのはスピノザの神そのものが消滅と再生を繰り返しているなどということではない。「変化する(changer)」とは、「或るものの『無化』や全面的な破壊、消滅ではなく、持つのをやめる偶有性や獲得しはじめる偶有性の基体は同じでありながら、或る状態から他の状態へ移行すること」に決まっている(267)。ベールによれば「変化」とは「1、こわされた形相の基体が新たな形相のもとでも存続するということ。2、基体の本質的なものがこのように保たれても、なおかつ、不変的な本性とは相容れない厳密な意味での内的変化を蒙るのをさまたげるものではないこと」(*ibid.*)という二つのことを前提にするものである。1では明らかに先ほど見たような「変化する」ことの定義が述べられている。問題は2である。すなわちベールによれば、そのような変化において基体の本質がそのままであるとしても厳密な意味での「内的変化」が生じている、とされる。それは「不変的な本性とは相容れない」ものである。したがってスピノザの「実体の変様」に関して、仮に実体としての神は本質的にはそのま

まであるとしてもその「内的変化」は避けられない。つまり、神の不変性が確保できないことになってしまうのである。ベールがスピノザの単一実体説を批判する理由のひとつにはこのような神の不変性に関する問題があるからだと考えられる。

第三節　作動因と質料因

註(DD)に戻ろう。被造実体を認めないことはまた、ベールによれば以下のような帰結をもたらす。ベールが「実体の変様」を問題にしているその他の箇所を見てみよう。

> 「要は、スピノザの体系で『変様』という語の真の意味は何かという事実問題なのである。これは創造された実体と普通言われるのと同じものと解すべきか、それともデカルト氏の体系でこの言葉が持つ意味に解すべきか。私はあとのほうがいいと思う。もうひとつの意味だと、スピノザは神の実体と区別されたもろもろの被造物を認めたことになるからである。そういう被造物は無から作られたか、神とは別の質料から作られたか、どちらかであろう」(269、傍点引用者)。

再度、スピノザが「実体の変様」をどのような意味で用いていたかが問題になっている。当然ベールはここでも、スピノザのそれが「もうひとつの意味」、すなわち「被造実体」の意味ではないと解釈する。

ところでこの引用では、被造実体を容認する立場に対してある問題提起がなされている。「神の実体と区別されたもろもろの被造物」、つまり被造実体が「無から作られたか」あるいは「神とは別の質料から作られたか」という問

題である。ベールは「スピノザが両方とも認めていない」と言う。もちろんこれまで見てきたように、スピノザは被造実体というもの自体を認めていないのであるから、その存在を前提とする議論自体が有効ではないことは当然であろう。しかし、被造実体が無から作られるか、神とは別の質料から作られるか、という各々の主張そのものに対するスピノザ哲学の立場からの反論をベールは行う。すなわち「無から作られる」ということについては、スピノザにとってはそもそも「無からの創造」は認められない。また「神とは別の質料から作られる」ということに対して、デカルトとは異なって延長は神の属性である以上個々の延長は神の内にあるのだから、「神とは別の」存在など認められないはずだ、と言うのである（*ibid.*）。また例えば、註（O）においては、スピノザにとって「〔永遠で神と異なる物質について〕必然的に存在するくせに活動力を欠き、他の原理に服従している物質など、理性が満足できるものではない。〔中略〕無から創造された物質というのも、それまで無だったものを実在的な実体に変える或る意志行為の観念をいくら持とうと努めたところで、やはり理解できる代物ではない」（262、括弧内引用者）。「神とは別の質料」、つまり神による「無からの創造」の困難を回避するために仮定された永遠の昔から存在する物質が、自ら運動する力を持たず神からの働きかけによってしか動きえないはずはなく神に服従する理由はない。もちろん「無からの創造」も認められない。スピノザにしてみれば被造実体を容認すればこうした問題を抱えこむことになる、とベールは考えているのである。

例えば『省察』の「第三省察」において、結果にあるのと同じだけの実在性を原因が有していなければならないのであるがゆえに「無からの創造」は認められるものではない、とデカルトは述べる。[4] それについて、デカルトと並んで「スコラ哲学を捨てたすべての哲学者」としてベールがその筆頭に名前を挙げていたガッサンディは、「第五

反論」において次のように自らの見解を述べる。

「『原因のうちに存しないいかなるものも結果のうちに存しない』ということは、作動因について理解されるよりも、むしろ質料因について理解さるべきであると思われます。というのは、作動因は外的なものであり、またたいていは結果とは異なった本性を有するものですから。そして結果は、その実在性を作動因から得てくると言われますが、しかし結果は、作動因が必然的に己れのうちに有する実在性を受け取るのではなく、作動因がどこか別のところから得てくることができる実在性を受け取るのです。〔中略〕一言で言えば、作動因が結果を含むのは、或る一定の質料からそれを輪郭づけ、完成させることができる、というかぎりにおいてであって、それ以外の理由からではありません」(AT, VII, 288-289、傍点引用者)。

ガッサンディは「無からの創造」を否定するのであれば、作動因自体が質料を含むものでない限り創造されたものの質料は作動因そのものからは出てこないのではないか、と考える。したがって、作動因のみによって全てが生み出されるのではなく「作動因とは別のところから」あるいは「或る一定の質料から」実在性を受け取る、つまり作動因たる神とは別にある質料の存在を示唆しているのである。これに対しデカルトは「第五答弁」において、「〈形相の完成〉は、けっして質料因のうちにではなくて、独り作動因のうちにのみ、前もって存在している」[5]と述べる。ガッサンディは「質料」の観点からの創造について問題にしているのに対して、デカルトはあくまでも「形相の完成」という形で答えるにとどまっている。とにかく、被造実体が「無から作られたか」それとも「神とは別の質料から作られたか」というベールの問いについて、もちろんデカルトとガッサンディはともに「無からの創造」を否

定するが、ガッサンディは明らかに「神とは別の質料」を認めている。一方ここでデカルトは、神とは別の質料を認めず、ただ作動因のみを認めている。またデカルトは神が物質を創造したことを明言もしている。(6) したがって非物質的な神が被造実体を創造する際、そこに物質性を付与することができるのかということが問題になる。しかしこれについては明らかでない。ただここでは、すでに見たようにスピノザはベールによって、ガッサンディに反論することは可能であることが言えよう。

このような文脈を背景にしてベールは次のように考える。例えば太陽が神の延長から生み出されるのでなければ、スピノザは「無からの創造」を認めざるをえまい。そしてスピノザは「創造を否定する」ために、神は太陽の「質料因」としてあり、「太陽は神と区別されず、神そのものであり、神全体である」(270)、と言う。すでに見たように、スピノザにあっては太陽は無からも「神とは別の質料」からも作られることはない。であるならば、太陽は神と区別されず神そのものであるというほかない。「物質が永遠と異なることも、物質が無から生み出されたことも、〔中略〕理解できなかった」ために、スピノザは「断崖へとびこんだ」(262)。ベールが「スピノザは創造を否定する」と述べるのは「外的なもの」としての作動因が生み出すという意味での「創造」を否定している、という意味である。すなわちベールによれば、原因としての神がその結果に物質性を付与することができるかという問題に対してスピノザは、物質性をそもそもの原因としての神に与え、さらに「創造」ではなく神そのものが「変様」していると考えている、ということになる。そしてそのような神は太陽の「質料因」としてある。ベールはまた次のように述べている。

「ほかの哲学者が言うには、創造された実体は作動因ないし他動因〔外在因〕(cause efficiente et transitive)としての神の内にあり、したがって神とは実在的かつ全的に(réellement et totalement)区別される。しかしスピノザによると、被造物は結果が質料因の内にあるように、または偶有性が内属基体の内にあるように、または燭台という形が燭台を構成する錫の内にあるようにして神の内にあるのである。三次元の物としての太陽や月や樹木は、それらの延長を構成する質料因としての神の内にある。だから、神と太陽等の間には同一性が存在する」(270、傍点・括弧内引用者)。

「ほかの哲学者」、すなわちデカルトにせよガッサンディにせよ、作動因としての神は「外的なもの」あるいは「他動的〔外在的〕(transitive)」であって、被造実体はそのような神の内にあるとはいえ、実体である以上神の実体とは「実在的かつ全的に区別される」。しかしベールによれば、「実体の変様」のカテゴリーに被造実体を認めないスピノザにあっては被造物と神の実体は区別されることができない。したがって「それらの延長を構成する質料因としての神の内にある」とは、「実在的かつ全的に区別される」ことができず両者には「同一性が存在する」。もちろん質料因だけでは何も生み出されない。しかしスピノザにおける神と被造物の関係において作動因が認められないことについてベールは、神が作動因であるとともにそれの対象であるのは「常軌を逸した仮説である」とすでに非難していた(259)。

むすび

ベールはスピノザによる実体の定義ではなく「実体の変様」の意味を問題にした。すなわち「実体の変様」には被造実体という概念が含まれているのかどうかということである。結局スピノザは被造実体の存在を認めてはおらず、そこからは二つの決定的な問題が導出される。まず神の「実体の変様」であるがゆえの神の不変性の否定である。ベールにとって神の不変性は、デカルトが言うように「いかなる変化も理解されるべきではない」(7)ような神の実体と被造実体とが明確に区別され、「実体の変様」とは被造「実体の変様」であるならば確保される。被造実体の否定はまた別の問題を派生させる。神の実体とは実在的に区別される被造実体の存在は、その「創造」の因果性において作動因が要請される。その両者が実在的に区別される限りにおいて、「外的なもの」という作動因の必要条件を満たすことができるからである。しかし、被造実体が否定されるスピノザにあっては「実体の変様」とは神の変様であり、その両者の間に実在的な区別はない。したがって「創造」はありえず、その「変様」ないし様態が生じるためには神そのものに延長を認める他はない。そして、そのような神は質料因であるということになる。もちろん質料因のみでは何も生み出されるはずもなく、スピノザ自身は神が質料因であるなどとは言わず作動因であると(8)する。また、神の不変性に関しても「神あるいは神の属性は不変である」と述べる。(9) しかし、作動因は外在的であるとするベールにとって、神は内在因でありかつ作動因であるとするスピノザの見解は矛盾以外の何物でもない。ところで、ここでは作動因を内在因とすることが転換点となって、神の不変性を含めた議論の問題系を変容させてしまっているのではないか。

とりあえずの結論として言えるのは、スピノザは被造実体を認めなかったがゆえに他の哲学者とは違った道を歩んだ、というのがわれわれが見てきた限りでのベールの批判であり、それは裏を返せば神からどのように物質が生じたのかという困難な問題に対するひとつの解答になっている、ということである。すなわちベールは、世界の多様性について、無から生み出されたのでもなく永遠で神とは異なる物質の存在を仮定することもないような、ベールの考える「創造」とは別の解答をスピノザから引き出す。「スピノザはいやでも、神が物質と区別されず、必然的に力のかぎり作用し、それも自分自身の外ではなく自分の内部で作用するような、そういう新たな体系を求めざるをえなかった」(262)。ベールは神と区別されないようなそうした物質、すなわち延長に能産性を認めている。しかしそのような延長はもはや能産的自然としての属性であるだろう。われわれはここで、スピノザのある書簡を思い起こすことができる。それは、いかにして延長から事物の多様性が生じるのかと問うチルンハウスの質問に答えるものである。そこでは、単なる延長の概念からしてはそれは不可能であるとして、デカルトが物質を単なる延長と定義しているのは正しくなく、事物の多様性は永遠無限の本質を表現する属性によって説明されなければならない、と言われていた。(10) デカルトにおける事物の多様性は、被造実体としての延長の変様であり、その前提としての被造実体の「創造」の説明は困難が伴う。しかしスピノザにおいては「創造」ではなく、神の属性としての延長それ自身が能産性を有することから事物の多様性が生じうる。ベールの批判は図らずもこれを説明してみせた。

注

ベールのテクストは、*Dictionnaire historique et critique*, 5.éd. de 1740, tome. 4, Geneve: Slatkine Reprints, 1995, を用い、典拠については引用の後の括弧内に頁数を示した。引用に当たっては、野沢協訳『歴史批評辞典』(『ピエール・

ベール著作集第三―五巻』法政大学出版局、一九八二―一九八七年）を参照したが、必要に応じて適宜改めた。またデカルトのテクストについては、アダン・タヌリ［AT］版デカルト全集（*Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Paris, rééd., C. N. R. S-Vrin, 1964-1974）を用い、典拠については引用の後の括弧内にローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を示した。引用は基本的に所雄章編訳『デカルト著作集』（白水社、一九七三年）に負っている。

（1）Descartes, *Principia philosophiae*, AT, t. VIII, p. 26.
（2）E1Def. 5.
（3）Descartes, *op. cit.*, p. 24.
（4）Descartes, *Meditationes de prima philosophia*, AT, t. VII, p. 40-41.
（5）*ibid.*, p. 366.
（6）Cf. Descartes, *Principia*, p. 61-62.
（7）*ibid.*, p. 26.
（8）E1P16C1.
（9）E1P20C2.
（10）Ep83.

（大学院後期課程学生）

SUMMARY

La création et la substance comme cause immanente: critique de Spinoza par Pierre Bayle

Akinori NAKANO

Dans *Dictionnaire historique et critique*, Pierre Bayle critique la seul substance chez spinozisme. Selon Bayle, le spinozisme se resume en trois points suivants: 1 qu'il n'y a qu'une substance dans l'Univers; 2 que cette substance est Dieu; 3 que tous sont des modifications de Dieu. Alors, il examine le sens du mot ≪modification de substance≫ chez Spinoza, non pas de ≪substance≫. Il comprend que Spinoza le prend en ce meme sens chez Descartes.

Mais, à la difference de Descartes, Spinoza n'admet pas de ≪substance créée≫. C'est-à-dire, il ne reconnaît pas des creatures distinctes de la substance divine. Par coséquent, Spinoza considère, selon Bayle, la substance comme Dieu se modifie. Ainsi l'immutabilité de Dieu ne peux pas assure.

Puis, Bayle refute non seulement l'immutabilité de Dieu chez Spinoza, mais aussi la causalité. Selon Spinoza, la cause efficiente est la cause immanente. Cependant, selon Bayle, elle est antérieure et différente à un effet et a pour cause autre chose. Autrement dit, elle est la cause transitive. Par coséquent, Bayle entend la cause immanente comme la cause materielle, non pas la cause efficiente. Enfin, il n'admet pas que la création est la cause immanente.

キーワード　創造，被造実体，作動因，質料因，内在因